

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2012.09) 平成21年度:48～49.

高齢者におけるスチーム造設への思いと看護支援の検討

吉村さやか、前田裕美、清水 優、瀬川澄子

高齢者におけるストーマ造設への思いと看護支援の検討

6階東ナースステーション

吉村さやか、前田 裕美、清水 優、瀬川 澄子

キーワード：高齢者 ストーマ 直腸がん

<研究目的>

直腸がんと告知を受けた高齢者が、残りの人生をストーマと共に生活していくことを決意した過程には、どのような心理変化や思いがあるのかを明らかにする。

<研究方法>

対象者は2008年8～10月に直腸がんによるストーマ造設術を施行した70歳以上の入院患者4名とした。独自の質問項目を作成し、半構成的面接を実施した。面接内容を逐語録に記述し、コード化、カテゴリー化を行った。

<倫理的配慮>

患者に研究の主旨、プライバシー保護について書面および口頭で説明し、同意書に署名を得た。

旭川医科大学倫理委員会の審査を受けた。

<結果>

対象者の属性は、男性3名、女性1名。年齢は、74歳～87歳で平均年齢は80.75歳であった。面接時期は、退院1週間前から1週間後であった。逐語録は、274のコード、26のサブカテゴリーが抽出され、主要カテゴリーを3つ見出した。

術直後の患者は「ストーマを見ることができない」と、<現実を否認>していた。装具に対しては、「貼るのは難しい」、「蓋が閉められない」と<ストーマケアを行うことへの困難感>や<難渋する手技獲得>がみられた。「いつ便が貯まるか分からない」と排泄経路の変化から<生活様式の変容に対する不便感>を抱いていた。「妻を亡くし歳を感じた」と配偶者や知人の死・病気により<老いを自覚>し、「元の役割ができない」と<生きがいの喪失>や「こんな身体になり何もできない」と<否定的な自己概念>を表現していた。ストーマのついた現実を認識した後は、「仕方ない」と<ストーマに抱く葛藤>があった。段階を経た指導後は「自分でしたい」と、徐々に<手技獲得の自信>を持ち始め、便処理の手技を習得した後は、「便を捨てるのは俺だ」など<便処理の積極的な姿勢>がみられた。ケアを繰り返す中で患者は「はさ

みを使わなくても穴を調節できる」と巧緻動作が少ない、プレカットした<装具の簡便さ>を肯定的に表現していた。一連のケアについて「全部一人でできる」と<退院後のセルフケアへの自信>を抱き<ストーマの受容>につながっていた。これらを【ストーマ生活に適應するプロセスにみられた揺れる気持ち】とした。

患者にとって家族の存在は「子どもが生きているだけで良いと言った」「妻がいるから安心」と<家族の支え>や<家族による精神的安寧>へつながっていた。一方で「迷惑をかける」と<家族への負担感>を抱いていた。これらを【家族の支えへの安心感と依存への抵抗感】とした。

患者は「早く病院に行けばよかった」と<自分の過去の受診行動を後悔する気持ち>や、<手術が想像できない>という不安を抱いていた。一方で「家族や医師に頑張るように言われた」と<他者からの励まし>が力になっていた。術後の体力低下を実感し「歩けなかったことが悔しい。練習する」と<自ら目標をたて対処行動をとる>姿があり、「癌は治せると思わないと治せない」と<治療への意欲>を抱き、「健康が一番何でもできる」と<健康の再認識>をしていた。患者はケアを習得して行く中で「ストーマがついた体が自分だ」「授かりものだ」と<ストーマがついた自分を認める>ことができていた。「定年後も望まれて働いた」「子供を大学へ行かせた」と仕事や親役割としての<過去の成功体験>を語る中で、「長生きしたい」「人のためにできることをしたい。それが生きがい」と<ストーマとともに生きる意欲>を見出し、<人生を再構築>し前向きに捉えていた。これらを【語りを通した自己の強みへの気づき】とした。

<考察>

森山ら¹⁾は、「良好な健康状態とストーマに異常がないことが強くストーマの受容度と関係していたと示し、家族や身近な人からの理解や励ましはストーマの受け入れにもっとも手助けとなり、情緒的サポートの重要性が改めて示された」と述べている。本研究においても患者は、ストーマとともに生きていく過程で肯定的な思いと否定的な思いの両者の相反する揺れる思いを抱いていた。家

族の支えや絆を感じ、装具の簡便さで自信を得、医療者からの言語的説得から、ストーマへ適応していく過程が見えた。また高齢者は、役割の喪失を経験し、自尊感情の低下をきたしていた。面倒さや不自由さによるセルフケア能力の低下は、否定的自己概念を生み、自己概念の否定はセルフケア能力を低下させるという悪循環が生じやすい。看護者は、その悪循環をきたすことのないように患者の自己効力感を高める介入が必要である。看護者は、高齢者のこれまで生きてきた個人史を肯定的にとらえた関わり、そして発達課題の中での成功体験や、ストーマケア手技獲得の経過を通し、前向きに生活できるような介入が重要である。

<結論>

1) ストーマ造設後の高齢患者が抱く思いは【ストーマ生活に適応するプロセスにみられた揺れる気持ち】【家族の支えへの安心感と依存への抵抗感】【語りを通し自己の強みへの気づき】の3つの主要カテゴリーが抽出

される。

- 2) 高齢者は、相反する思いを抱きながら家族や医療者のサポートを得、ストーマとの生活に適応している。
- 3) 看護者は、高齢患者に対し成功体験の語りを通し自己効力感が高まる肯定的介入が重要である。

引用・参考文献

- 1) 森山美知子、他：オストメイトのストーマ受容度とセルフケア状況およびストーマ受容影響要因との関係性、*広大保健学ジャーナル*, Vol.6, 2006
- 2) 梶原睦子：「ストーマの受容」という概念の再考、*山梨医大紀要*第18巻, 55 - 60, 2001